

教育 を 読む

河合文化教育研究所
主任研究員 丹羽健夫

「中巻 景行天皇より」

やまとたけのみこと

倭建命は景行天皇の息子である。ある日天皇が申されました「お前の兄さんは最近ご飯に顔を出さない。出てくるように言っておいで」

倭建がそのことを兄さんに伝えると兄さんは、「嫌だ」といいました。そこで倭建命は父の命令が聞けぬかと、兄さんの手足をばきばきと薪のように折って、菰こもに包んで谷底に捨ててしまいました。おどろいた父の景行天皇は「息子の倭建は剛勇だが危険なやつだ。消してしまおう」と考え、「九州に、私に服従しない無礼な熊曾建兄弟くまそたけるがいる。彼らを退治してまいれ」と命じました。

倭建が勇猛で鳴る熊曾建兄弟のところに行ってみると、家を新築したお祝いの最中でした。倭建は女装してお手伝いさんになりすまして兄弟にお酌をし、ほどよく酔った熊曾兄弟をころあいをみて近づくと懐から短刀を取り出し、一刀のもとに兄弟を討ち果たしました。実は女装用の着物も短刀も、出発前に伊勢神宮に勤めている叔母やまとひめのみことの倭比売命のところへ挨拶にいった



◀ 新版 古事記 現代語訳付き
中村啓信 訳注
角川ソフィア文庫
定価 本体 1,124 円+税

ときに渡されたものです。倭比売は千里眼の能力を持っていたのです。

倭建はよろこび勇んで帰り、父の景行天皇に報告しました。ところが父は「今度は直ちに静岡県静岡県の賊を退治してまいれ」と命令しました。さすがに倭建はこのとき父に疎まれていることを悟ったのでした。このときも倭建は出発に先立って伊勢神宮の叔母の倭比売を訪ねました。叔母は倭建に火打ち石と一振りの剣を持たせました。

今度の道中は妃の弟橘比売命おとたちばなひめのみことと一緒にいました。賊を平らげつつ焼津までまいりますと、賊は野に火を放って倭建を焼き殺そうとしました。倭建はさすが叔母さんに渡された剣で草をなぎ払い、逆に火打ち石で火を放ち賊を退治してしまいました。さらに進んではしりみず関東に行くために、走水の海を渡ろうとしたときに海が荒れて船が進みません。そのとき弟橘比売が「私が生贄になりましょう」といって、歌を一首よみ海に入りました。

さねさし 相模の小野に 燃ゆる火の 火中に立ちて 問ひし君はも
(相模国の小野に 燃えて迫る火の 火の中に立ちて わたしの名をお呼

びくだったあなたよ)

すると海は静まりかえり倭建は無事に関東の地に渡ることができました。その海岸で倭建は打ち上げられた、弟橘比売の櫛を見つけ拾い上げました。

それから関東から信濃、そして尾張、三重へと遍歴しながら、帰ることを許されない故郷の大和を想って望郷の歌を詠います。

倭は 国のまほろば たたなづく青垣やまと 山隠れる 倭しうらわ 麗し

(倭は 国のもっとも秀いでたところ 重なり合っている山々の 青い垣 山々に囲まれた 倭は すばらしい)

はしけやし 我家の方よ 雲居わぎ 立ち来も

(いとおいしい 我が家の方から 雲が立ち渡ってくるよ)

そうか。神話や伝説には個人の作者はいない、したがって意図されたプロットもなければ起承転結もない。それだけに時には奇想天外であり、時には意味不明である。そこには何ともいえない摩訶不思議な懐かしさや、美しさや、惹かれるものがあるのだ。